

交隣須知の系統(Ⅱ)

——卷二の対照比較分析——

片 茂 鎮

1. はじめに

「交隣須知」なる書には多数の異本があり、しかも各巻ごとにも違った様相を呈しているだけに、本書の系統を究明するには各異本間の多角的な比較検証が必要となる。特に本書の成立初期には、韓国語文だけが合ったものに後から対訳の日本語文が追加されたもので、韓国語文と日本語文を比べると、韓国語文は諸本間において保守性の強い反面、日本語文は相対的に変化が多いことが指摘されている¹⁾。結局、諸本間の関係を究明するに当たっては、まず韓国語文を対象として、それらが各異本間においてどのように変えられたかを究明することから始まらなければならない。本稿は、巻二諸本の韓国語文の相異を検討することによりその系統的関係に一考察を与えるもので、巻一の諸本対象比較分析(大友信一博士古稀記念論集『棲加林学報』第四輯)²⁾に次ぐものである。

2. 「交隣須知」巻二の諸本と部門立て

2.1. 対象となる巻二の異本

- (1) 交隣須知 巻二(書写期不明、19世紀初?)、京都大学所蔵; 苗代川本=〈苗〉
- (2) 交隣須知 巻二(中村庄次郎書写 1868~1873)、前岡恭作摹写本、ソウル大学所蔵; ソウル大本=〈ソ〉
- (3) 交隣須知 巻二(書写期不明、1880年頃?)、東京大学小倉文庫所蔵; 濟州本=〈濟〉
- (4) 交隣須知 巻二(部分、W.G. Astom 書写、1885年)、アストン旧蔵、朝鮮語会話書〔仮題〕所収; アストン本=〈ア〉³⁾
- (5) 交隣須知 巻二(浦瀬裕校正増補、1881年)、明治14年印行; 初刊本=〈刊〉

1) 浜田敦(1970)『朝鮮資料による日本語研究』pp.31~32参照。

2) 片茂鎮(2001)「交隣須知の系統—巻1の対照比較分析—」

3) これは、ロシア東方学研究所サントペテルブルグにアストン旧蔵本として所蔵されているもので、朝鮮語会話書(仮題)〔図書番号: C5〕に所収されている。アストンがソウルの英国総領事として在韓しているときに書写したもので、「交隣須知」巻二の一部に該当する。(岸田文隆(1998)参照)

卷二といっても、増補本類や刊本の卷三に含まれているものも混ざることになるが、それは古写本系の苗代川本の項目順にしたがった結果である。それと関連して、他に長崎大学付属図書館経済学部分館内の武藤文庫に所蔵されている「交隣須知」卷三の一部のものも含めて、一緒に扱うことにする。

2.2. 部門立て

各異本における部門も配列を表にすると次のようになる。

〈苗代川本〉	〈ソウル大本〉	〈濟州本〉	〈アストン本〉	〈刊本〉
身部				羽族
(卷一終)				(卷一終)
(卷二始)	(卷二始)	(卷二始)	(卷二始)	(卷二始)
飛禽	走獸	走獸	(走獸)	走獸
走獸	水族	水族	水族	水族
水族	昆虫	昆虫	昆虫	昆虫
昆虫	禾黍	禾黍	禾黍	禾黍
禾黍	蔬菜	蔬菜	蔬菜	蔬菜
蔬菜	農圃	農圃	農圃	農圃
農圃	果実	果実	(果実)	果実
樹木	花品	花品	花品	花品
花品	草卉	草卉	草卉	草卉
草介	都邑	都邑	宅宮*	宮宅*
都邑	宅宮	宅宮	都邑*	都邑*
城路	味臭	味臭	味臭	味臭
宅宮	喫貌	喫貌	喫貌	
金宝	熟設	熟設	熟設	
布帛	売買	売買	売買	
彩色	疾病	疾病	疾病	
(卷二終)	行動	行動	行動	
	(卷二終)	(卷二終)	(卷二終)	
(卷三始)	(卷三始)	(卷三始)	(卷三始)	
衣冠	墓寺	墓寺	墓寺	

古写本系の〈苗〉を除いて増補本類の部門は刊本と近いものとなっている。これは「交隣須知」の全巻に共通していて、〈苗〉と他の増補本類とは違う系列のものであることを物語っている。もちろん刊本は増補本類の系統を継ぐものであるが、ここでは特に〈ア〉との酷似性が認められる⁴⁾。本文に書き漏れと見える「走獸」「果実」門を補うとして、「宅宮」「郡邑」の順序が刊本と同じで、〈ソ〉〈済〉のそれとは異なっている。また〈ソ〉と〈済〉にはいわゆる増補欄があって増補本類写本の典型をなしているが、〈ア〉には増補欄はなく、増補された項目が該当部門の本文の後ろに収められ、刊本と同じ体裁をしている。ここで一つ推測を立てるならば、刊本の藍本となったのは〈ソ〉〈済〉のような増補本類よりは、むしろ〈ア〉の底本となった写本ではなかったのだろうか。つまり、増補本類と刊本の間に〈ア〉をおきたいのであるが、以下〈ア〉を中心に述べていくことにする。

3. 卷二の本文対照比較分析

3.1. 卷二諸本の本文の再構成

「交隣須知」の本文を研究資料として活用するために本文を再構成した。すなわち、交隣須知なる書の最も古い形を保ちしかも完帙本である苗代川本を基準にして、各項目（標題語）別に諸異本の本文を集め、それらの対照比較を容易にしたものである。その基準の詳細は片茂鎮（2001）を参照されたい。

3.2. 卷二諸本の項目比較（○：有、×：無）

3.1の基準により再構成した本文の項目（標題語）だけを比較して、その有無関係を示したのが次の表である（ただし、ここでは標題語の音読みだけが用例に立つ項目は無視する）。

	苗	ソ	済	ア	武	刊	
*	○	×	×	×	×	×	96
*	×	×	×	×	×	○	2
*	×	×	×	○	×	○	2
*	×	○	×	×	×	×	1
*	○	×	×	×	×	○	1
(a)	○	○	○	○	×	○	431
(b)	○	○	○	×	○	○	120
(c)	○	○	○	○	×	×	1
(d)	○	○	○	×	○	×	1
(e)	○	○	○	×	×	○	4
(f)	○	○	○	×	×	×	1
(g)	×	○	○	○	×	○	54
(h)	×	○	○	×	○	○	21
(i)	×	○	○	○	×	×	1
(j)	×	○	○	×	×	×	10
	計						746

4) この〈ア〉と〈刊〉の類似性に関して、本書の書写期（1885年）が明治14年（1881）より後であることから、本書が刊本を底本にして書写された可能性もなくもないが、後述するように、その本文は他の増補本類に近いものである。この点については岸田（1998）も指摘している。

「交隣須知」巻二の本文は総746個の標題項をもつ用例文で構成される。このうち、一つの異本、または一種の写本にだけある用例としてほかと比較の対象のない場合(*)の102項目を除けば、分析の対象となるものは、総644個の項目とそれの用例文である。

3.3. 巻二諸本の本文対照比較分析

巻一の場合と同じ方法で巻二の諸本間の関係を検討する。それは「交隣須知」なる書の本文たる韓国語文の相異の程度を記号化してそれを計量的に処理する方法であるが、用例の初出の異本を基準にして、各異本の本文同士を比較していくことである。相異の程度を判断する基準としては大体次のように定める。

基準：○

小幅の相異：◎ ◉ ⊙

中幅の相異：⊕ ⊖ ⊗

大幅の相異：● ● ●

別の内容1（小幅）：□ □ □

別の内容1（大幅）：■ ■

別の内容2（小幅）：◇ ◇

例えば、苗代川本の用例文を基準にした場合、他異本における◎◉⊙は小幅の相異、⊕⊖⊗は中幅の相異、●●●は大幅の相異を示し、□◇などは○系の用例と別の内容で、□⊕は□と比べて小幅の相異、□■は大幅の相異、◇はまた□系と別の内容であることを示す。相異の比較単位は文節とし、大体、一つの文中、1～2文節、3～4文節、5文節以上が内容的にも相異が認められる場合を目安に、それぞれ小幅、中幅、大幅の相異とする。そして各相異を示す記号の最初の2つは、さらに近似性の認められる項目に付ける（例えば、小幅の◎◉や中幅の⊕⊖など）。ただし、それぞれの記号は相異の文節数より相異の分別機能を優先する（例えば、3文節の用例文でも他の異本と相対的相異度から●が付き得る）。なお漢字の表記も含め、韓国語の字体に相異があっても、単なる表記上の問題として扱えるものになるべくその相異を認めない態度をとった。もちろん用例文の相異の程度を記号化する際、必ずしもきれいに区別がつくわけではなく、その基準の適用に多少主観的な判断が介入されたところもある。しかし全体の傾向性という観点からみた場合は、かなり真相に近い結果が得られるものと思われる。この方法による分析結果は、前述の部門立てに関する分析結果が断片的になりがちなところを補うものとして、なおこれからの「交隣須知」の系統的な関係を究明する上で非常に有効的なアプローチと考えている。

3.3.1. <苗><ソ><濟><ア><武>本文比較

3.3.1.1. <苗>と<ソ><濟><ア>にある場合(a+c); 432例

	<苗>	<ソ>	<濟>	<ア>	
(1)	○	○	○	○	176
(2)	○	○	○	◎◎	50
(3)	○	○	○	●	1
(4)	○	◎	◎	◎◎◎	105
(5)	○	◎	◎	◎◎	11
(6)	○	◎	◎	◎	1
(7)	○	●	●	●●	9
(8)	○	□	□	□■	18
(9)	○	◎◎◎◎□	◎◎◎◎□	○	30
(10)	○	◎◎□	◎◎□	◎	14
(11)	その他				17

(1)から(8)までは<ソ>と<濟>が同一の場合で、<苗><ソ><濟><ア>が同じ、しかも<ア>で小異のある例が全体の半分以上を占めている((1)(2))。一方、<苗>と<ソ><濟>とが異なっている場合は、<ア>は<ソ><濟>に近い用例文を探るケースが多い((4)~(8))。しかし逆の場合、すなわち、<ソ><濟>より<苗>に近い例も少なくない((9)(10))。その他はア≡ソ<濟>(9)、ア≡濟<ソ>(8)の例であった。

(2)の例

<苗/二35 b> 柴	식목은 넓피 업는 남기라
<ソ/二38 b> 柴	식목은 넓피 업는 남기라
<濟/二38 b> 柴	식목은 넓피 업는 남기라
<ア/二041> 柴	식목은 넓피 인는 남기라

(4)の例

<苗/二14 b> 錦鱗魚	금닌어 낙가 술 안쥬 호읍새
<ソ/二11 a> 錦鱗魚	금닌어 낙어 술 안쥬 호읍새
<濟/二11 a> 錦鱗魚	금닌어 낙어 술 안쥬 호읍새
<ア/二011> 錦鱗魚	금린어 낙가 술 안쥬 호읍너

(9)の例

<苗/二46 b> 閔	규방은 녀편너가 출입호읍너
<ソ/二50 a> 閔	규방은 녀편너가 출입호느니라

〈済／二50 a〉 關 규방은 너편너가 출입호느니라

〈ア／二050〉 關 규방은 너편너가 출입 호읍너

このように〈ア〉は古写本系の〈苗〉との関連性が認められるなど、原「交隣須知」から刊本にいたる過程において、〈ア〉の果たした役割についてなおも検討が要求されよう。

3.3.1.2. 〈苗〉と〈ソ〉〈済〉〈武〉にある場合 (b + d) ; 121例

	〈苗〉	〈ソ〉	〈済〉	〈武〉	
(1)	○	○	○	○	38
(2)	○	○	○	◎	1
(3)	○	◎	◎	◎	29
(4)	○	⊕	⊕	⊕◎	8
(5)	○	●	●	●●	9
(6)	○	□	□	□⊗	30
(7)	○	●	●	◎	1
(8)	○	□	□	●	1
(9)	その他				4

〈武〉も〈苗〉や〈ソ〉〈済〉によく似た用例文をもつ面では〈ア〉と同様であるが、〈ソ〉〈済〉より〈苗〉に近い用例をもつ例はほとんどない。〈武〉は〈ソ〉〈済〉のような増補本類と非常に近い関係にあるものと思われる⁵⁾。

(5)の例

〈済／二53 b〉 刪砂 봉사가 쓸 디 이시니 약간 여더 주옵소

〈ソ／二09 b〉 刪砂 봉사를 써야 쇠를 니엿느니라

〈済／二09 b〉 刪砂 봉사를 써야 쇠를 니엿느니라

〈武／二09 b〉 刪砂 봉사가 이셔야 쇠를 니엿습거든

次は、どの場合にも酷似性をみせる〈ソ〉と〈済〉について少し検討してみよう。

3.3.1.3. 〈苗〉〈ソ〉〈済〉(a + b + c + e + f + g + h + i + j)の関係 ; 644例

(1) 〈ソ〉 = 〈済〉 620

(2) 〈ソ〉 ≠ 〈済〉 24のうち

5) 片茂鎮(2002)「武蔵文庫本『交隣須知』について」参照。武蔵本の巻一は〈苗〉に近い用例文が多く、巻四はほとんど全用例が〈苗〉に同じ小異のものである。しかし巻三は〈ソ〉〈済〉との近似性が認められる。

〈苗〉 ≙ 〈濟〉 〈ソ〉 ; 15

〈苗〉 ≙ 〈ソ〉 〈濟〉 ; 3

上の数字からもわかるように、さすがに〈ソ〉と〈濟〉は644例のうち620例が酷似しているところから、一応両書は同一の底本から書写されたものと見受けられる。しかし、〈ソ〉と〈濟〉が同じでない24例のうち、〈ソ〉と〈苗〉が近い例より〈濟〉と〈苗〉が近い例が圧倒的に多い。全体数が少ない例なので確実なことは言えないとしても、〈ソ〉より〈濟〉のほうが〈苗〉に近いことは言えそうである。

(2)の例

〈苗／二06 b〉象 코키리는 코히 쥐가 들면 견디지 못하옵네
 〈ソ／二01 a〉象 코키리는 코의 쥐가 들면 못 견디여 하옵네
 〈濟／二01 a〉象 코키리는 코의 쥐가 들면 견디지 못하옵(니)

果たして〈ソ〉〈濟〉の底本が同一のものだったかどうかの判断は全巻の総合的な考察後に委ねたいが、その書の書写期と他書との系統的関係は必ずしも比例するものではないと考えられる。

例えば、

〈苗／二59 b〉染 물드리는 슈공은 얼마나 흥은고
 〈ソ／三21 a〉染 물드리는 슈공은 언마나 흥고
 〈濟／三21 a〉染 물드리는 슈공은 언마나 흥은고

の例において、〈苗〉との関連性からみて、書写期の早い〈ソ〉の用例文よりは書写期の遅い〈濟〉の用例文が〈苗〉に近い。〈苗〉얼마나 흥은고→〈濟〉언마나 흥은고→〈ソ〉언마나 흥고のような伝写のプロセスが自然で、またその蓋然性が高いとみたいのである。実際、「交隣須知」の中でもっとも古形を保っていると言われる〈苗〉もその書写期は19世紀初と推定されていて、1795年に書写された小田本の「増補交隣須知」よりも時期的に後である。

3.3.2. 刊本と増補本類との関係

3.3.2.1. 〈刊〉と〈ソ〉〈濟〉〈ア〉の場合 (a+g) ; 485例

	〈ソ〉	〈濟〉	〈ア〉	〈刊〉	
(1)	○	○	○	○○○○○	204
(2)	○	○	○	●●	9
(3)	◎◎◎	◎◎◎	◎◎◎	◎◎◎●●	88
(4)	●	●	●	●●	8
(5)	□	□	□	□□	11
(6)	その他				35

(7) 刊 ≙ 〈ア〉 〈ソ〉 〈濟〉 112

(8) 刊 ≙ 〈ソ〉 〈濟〉 〈ア〉 18

(1)から(5)までのデータからも分かるように、全体の3分の2以上が増補本類の本文に小異を加えた形の本文をもつ刊本の例である。これは〈ソ〉〈濟〉と〈ア〉が同一の場合で、刊本で増補本類の本文を受け継いだものとみていいと思う。但し、(7)(8)のように、〈ソ〉〈濟〉と〈ア〉に相異があった例で〈刊〉との関係を見ると、〈ソ〉〈濟〉より〈ア〉に近い刊本の例が〈ソ〉〈濟〉に近い例より圧倒的に多い。このような現象は〈ア〉と〈刊〉との関連性を示すもので、前述の推定を裏付けられるものと思われる。

(7)の例

〈苗／二11 b〉 馬嘶	물이 봄이면 야비달하옵니
〈ソ／二07 b〉 馬嘶	물이 봄이면 야비달하옵니
〈濟／二07 b〉 馬嘶	물이 봄이면 야비달하옵니
〈ア／二007〉 馬嘶	물이 봄이면 즈로 우옵느니
〈刊／二06 a〉 馬嘶	물이 봄이면 즈로 웃느니라

(8)の例

〈苗／二27 a〉 細毛	가슴를 그리도 만히 쓰옵느니잇가
〈ソ／二27 a〉 細毛	가슴리를 그리도 만히 쓰옵느가
〈濟／二27 a〉 細毛	가슴리를 그리도 만히 쓰옵느가
〈ア／二028〉 細毛	가슴리를 그도 만히 쓰옵느가
〈刊／二20 a〉 細毛	가슴리를 그리도 만히 쓰옵느가

もし〈ア〉が〈刊〉を書き写したとすれば、〈ア〉において 우옵느니 や 쓰옵느가 のような、刊本のそれより古い表現や表記が採用されていることに対する説明が難しくなる。〈ア〉から〈刊〉と考えるのが妥当だと思う。

3.3.2.2. 〈刊〉と〈ソ〉〈濟〉〈武〉の場合 (b + h) ; 141例

	〈ソ〉	〈濟〉	〈ア〉	〈刊〉	
(1)	○	○	○	○◎◎	53
(2)	○	○	○	●	1
(3)	◎◎	◎◎	◎◎	◎◎◎	26
(4)	●	●	●	●●	6
(5)	□	□	□	□回	27
(6)	その他				16
(7)	刊 ≙ 〈武〉 〈ソ〉 〈濟〉			6	

(8) 刊≡〈ソ〉〈済〉〈武〉 6

〈刊〉は〈武〉を含めた増補本類の本文と近似性をみせている。〈武〉と他の増補本類との間では〈ア〉のような偏りは見られない。やはり〈ソ〉〈済〉と〈武〉の近似性によるものであろう。

4. おわりに

「交隣須知」の巻一に続いて巻二諸本の本文(韓国語文)を対照比較してみた。巻二の場合他の巻に比べ異本数が少ないこともあって、古写本系の非増補本類から増補本類を経て刊本にいたる過程を比較的単式化できる。しかし、アストン旧蔵の朝鮮語会話書に所収されている「交隣須知」は、増補本でありながら刊本のような増補欄をもたない、新しい形の写本と言える。本稿では、一応それを増補本類と刊本の間におくことによって、原「交隣須知」から刊本にいたる系譜に加えたいのであるが、当然でありながら、韓国語の表記・語彙・語法の面からのより細かい検討が必要であろう。それは今後の課題として、「交隣須知」の全巻を対照とした総合的研究の稿に譲りたい。

〈参考文献〉

- 岸田文隆 (1998) 「アストン旧蔵の『交隣須知』関係資料について」『朝鮮学報』167
- 迫野俊徳 (1989) 「文献方言史総論」奥村三雄編『九州方言の史的研究』桜楓社
- 浜田 敦 (1970) 『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店
- 福島邦道 (1968) 「『交隣須知』の増補本について」『国文学言語と文芸』57
- _____ (1968) 「『交隣須知』の初刊本」『実践国文学』24
- 片 茂鎮 (1998) 「対馬本『交隣須知』에 대하여」『日本文化学報』5、pp.139-157、韓国日本文化学会
- _____ (2001) 「交隣須知の系統—巻の対照比較分析—」『椋伽林学報』4、pp. (257) - (264)
大友信一博士古稀記念論文集
- _____ (2002) 「武藤文庫本『交隣須知』について」『日本文化学報』15、韓国日本文化学会
- Hayashi, N. & Kornicki, P. (1991) Early Japanese Books in Cambridge University Library - A catalogue of the Aston, satow and von Siebold Collections-. Cambridge: Cambridge University Press.
- (ピョン ムジン 韓国・椋伽大学教授)